

一般社団法人日本社会福祉学会第 62 回 春季大会 報告

大会運営委員会委員長 金子 光一（東洋大学）

2014 年 5 月 25 日（日）13 時より東洋大学白山キャンパス 1 号館 1102 教室で、第 62 回春季大会が開催された。

岩田正美会長の開会の挨拶の後、2013 年度に日本社会福祉学会学術賞を受賞された小原眞知子会員の講演（要介護高齢者のアセスメント—退院援助のソーシャルワーク）が行われた。小原会員は、ご自分の研究を、援助実践から出発したものであるが、その成果を実践現場に還元することを念頭においたものであったと述べ、研究の概念モデル、作業プロセス等をわかりやすく講演して下さった。

その後、13 時 50 分からシンポジウム（開かれた学、批判の学としての社会福祉学の展開～一番ヶ瀬社会福祉研究の検証と継承～）が行われた。冒頭、コーディネーターの古川孝順会員（西九州大学）が、各シンポジスト、コメンテーターを紹介した上で、一番ヶ瀬名誉会員が生前切り拓いてこられた社会福祉学の理論・歴史・政策・実践を再度検証し、今後われわれがそれをどのように引き継ぐべきであるかを、参加者と共に考えたいというシンポジウムの趣旨を述べた。

まず、永岡正己会員（日本福祉大学）が、一番ヶ瀬名誉会員の体験的な原点、研究の前提を踏まえて、歴史研究の体系化と実践・理論の相関という視点から述べた。また、一番ヶ瀬名誉会員の研究歴における視座の変化、全人的枠組みへの広がりや深まりについて総括的に論じた上で、一番ヶ瀬名誉会員が社会福祉における人権と平和の問題を強調していた意義を今日改めてわれわれは重視すべきであると述べた。

次に、山縣文治会員（関西大学）は、一番ヶ瀬名誉会員の社会福祉研究が家政学をベースとしたものであると捉える視点の重要性を述べた上で、岡村名誉会員との比較を通じて一番ヶ瀬名誉会員の研究の特徴を論じた。その上で、一番ヶ瀬名誉会員の社会福祉研究は、生活に寄り添う視点を徹底的に追求し、科学化を志向した点や、新しい問題を福祉との関係で位置づけようとした点で評価できると述べた。

さらに、中川清会員（同志社大学）は、社会福祉と社会政策の関係を、社会福祉は、ミクロの生活問題＝生活事例から出発し、マクロを介在して、ミクロレベルで集約されるのに対して、社会政策は、マクロの生活問題＝生活状況から出発し、ミクロを介在して、ミクロレベルで集約されると述べ、生活支援（あるいは社会福祉）と生活保障（あるいは社会政策）とはともに、その内部では完結できず、両者は、論理的に開かれており、生活問題の解決に向かって相補い合う関係にあると論じた。

最後に、岩田正美会員（日本女子大学）が、これまでの日本の「社会福祉学」の独自の

展開を分析し、その上で一番ヶ瀬福祉学における「学」の成立と「科学性」について論じた。また、一番ヶ瀬名誉会員から何を批判的に継承するのかについて、5つにまとめて解説した。①社会福祉は、Field であるが、研究の傾向、方向性、体系など Discipline もある。②同時に実態としての社会福祉の存在があることを認識すべきである。③「反証の学」を再び問い直す必要がある。④一番ヶ瀬名誉会員の研究は、対象としての「生活者」へのこだわりと、それへの還元に留まっていた。⑤政策学の展開においても前提の議論に留まっていた。その上で、社会福祉が「学」や「論」として成り立つか、われわれに問われていると論じた。

すべてのシンポジストが報告した後、コメンテーターの井岡勉名誉会員（同志社大学・名誉教授）が、それぞれのシンポジストに対してコメントした。井岡名誉会員は、本シンポジウムが、改めて一番ヶ瀬ワールドの特徴を再確認し、そこからわれわれが学び継承することが何であるかを考える重要な機会になったと述べた。

休憩時間を使って質問用紙を回収し、後半はその質問に各シンポジストが答える形で進められた。会場からは大変多くの質問があり、今回のシンポジウムに対する関心の高さが窺えた。その後、コーディネーターの古川会員が、先学の研究を分析する際に留意しなければならない点について述べた。

最後に、特別ゲストとしてお越し頂いた一番ヶ瀬名誉会員の実弟（一番ヶ瀬亘(ワタル)氏）にご登壇頂き、一番ヶ瀬名誉会員の戸籍、カトリック洗礼、鐘ヶ淵紡績株式会社丸子工場での舎監時代の話など、ご家族でなければ知ることができないお話を伺った。

閉会の挨拶で、牧里每治副会長（関西学院大学）は、一番ヶ瀬名誉会員と関わりをもちながら、現在各領域の第一線で活躍しているシンポジストから批判継承すべき点を提起していただき、われわれに託された課題が大きくまた深いことが、今回のシンポジウムで改めて認識されたと述べた。参加者は、昨年度を上回る 184 名で、盛況のうちに幕を閉じた。